

30 ‘患者中心設計’ となる検査室を目指して

医療法人ヘブロン会 大宮中央総合病院

○蓮見 浩之

1. 背景

平成 22 年 4 月 30 日厚生労働省医政局長から「医療スタッフの協働・連携によるチーム医療の推進について」(医政発 0430 第 1 号) の通知が発せられ、現在診療放射線技師のさらなる役割の一つとして、放射線検査等に関する説明・相談を行うことが明文化され求められる。そして当たり前のことを分かりやすく、正確で確実に伝え、安全で安心の高質の医療提供が求められている。

これを受けて、日常業務において検査の説明を改めて意識的に行う中で、患者さんから放射線機器に関する質問を受け、改めて放射線検査の説明の、とりわけ放射線機器と患者さんの関わりについて着目し、当院放射線科内の検査説明のマニュアルを改めて見直すも、放射線機器と患者さんの関わりについての部分は、当たり前とされてしまっている現状があった。

2. 目的

放射線検査の説明において、放射線機器と患者さんの関わりの部分を改めて意識することで、検査説明の質をより一層のものとし、現在求められている、安全で安心の高質の医療提供に寄与することを目的とした。

3. 方法

当院放射線科内にある各検査モダリティにおいて、検査の説明はもちろんのこと、とりわけ放射線機器と患者さんの関わりの部分についての説明で、意識していること、日頃心掛けていること、伝えなければならないと意識していることなどを調査するアンケートを、当院放射線科スタッフ 18 名へ実施した。

4. 結果

アンケートを診療放射線技師・看護師・看護助手らから実施することで、多角的な視点を得ることができた。そしてアンケートを行うことで、改めて放射線機器と患者さんとの関わりをスタッフ皆で意識し、放射線機器の説明の必要性を考えるきっかけとなった。

5. 考察

放射線機器の説明の必要性について、人間工学を用いて考えると、これまで当たり前に行っていた放射線機器の説明を、科学的に理解し、検査説明の一つの要素として捉えることができた。

日常における機械と人間の関わりを科学的に理解する、人間工学の手法は人間が日常生活で使用する機械のデザインに多く取り入れられており、人間の機械への抵抗を極力なくすように配慮され、図 1 に示すように機械と患者さんの間を取り持つ位置に人間工学の手法が盛り込まれ、人間中心設計となるよう働いている。

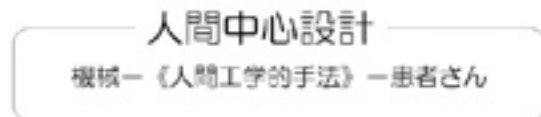


図 1：人間中心設計と人間工学

一方で、放射線検査室にある放射線機器は、検査に来られる患者さんが日常生活で使用するような機械とは異なり、使用に際しては診療放射線技師が間に立つことを前提として作られている。

よって診療放射線技師は放射線機器と患者さんの間を取り持つ立場にあり、放射線機器の説明を通して、患者さんの機械への抵抗を極力なくすように配慮することで、図 2 に示すように患者中心設計となるように働き、検査説明の質をより一層のものとするすることで、現在求められている、安全で安心の高質の医療提供に寄与することと考えた。

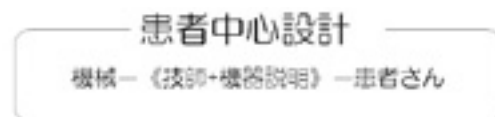


図 2：患者中心設計と機器説明

6. 課題

放射線機器と患者さんの間を取り持つ立場として、検査説明の、とりわけ検査機器の説明を、適宜果たすことに関する検討は、これからの課題である。